

「吉川村誌」(「吉川村づくり推進委員会」平成二十四年発行)

大和 淑子さんの談話(当時、賀茂高等女学校四年生 十六歳)

昭和十八(一九四三)年、賀茂高等女学校に行っているときに、学校が陸軍の被服廠になりました。広島から移転してきたんです。兵隊さんの服を縫っていました。それが学徒動員の始まりでした。

私らより上の生徒さんは、挺身隊として呉へ行かれました。私たちは昭和二〇年の一月には呉の軍需工場に動員されました。旋盤工です。船の部品でしょうか。「秘密じゃ教えられん」いうて教えてもらえなかったです。油もぐれになってねえ、鉄に触るから冷たいんです。裸電球が下がとるのへ手を当てて温めました。床も冷たかった。

工場も寄宿舎も暖房がなくて、それは寒かった。鳥取の倉吉高女の生徒さんなど、よその学校からも来られていました。

給金は出っていたのですが、お金は学校に振り込みで、そこから月謝を引かれて家へ送られるので。どのくらいの金額だったのか、定かではありません。

呉から広の海軍工廠へ行きました。よう忘れん、男の指導員は気の荒い人でね。軍隊と一緒にですよ。女でも段られました。辛い目にあいました。

寄宿舎は大部屋に三〇人くらいが一組でした。舎監がまた、厳しい女の人でした。食事もひどかったですよ。麦飯ならまだええけど、いろんな雑穀が入っていました。ドブ(魚の臓物)と大根を炊いたのが臭うてね。おなががすいていてもあれを食べる気にはなれませんでした。

たまにリンゴなんかの配給があったけど、長いこと並んで待っても順番がきたら品物がなくなっていることもありました。

吉川からも、一五、六歳で志願されて兵隊に行かれた人は多いですよ。それでも、出征された方の中には、泣く泣く出て行かれた人も多いんじゃないですかねえ。そりゃあ、表だつては言えません。顔に見せたら「国賊じゃ」「非国民じゃ」言われてねえ。

原爆投下後、女学校の先生に引率されて、広島へ救援にも行きました。炊事や看護師さんのまねごとですよ。したこともないのに、傷の手

当てをしました。

最初に行ったのは、爆心地に近い本川小学校で、最高に暑いときで、担ぎこまれる人がひどいやけどで目をそむけるような見るも哀れな状態で、薬といっても何もないんじゃないから。「赤チンを塗りなさい」言われて塗るくらいでした。

「お腹がすいた、お腹がすいた」言うてじゃから、むすびを作って食べてもうたけど、次の朝には、もう死体になっとってんじゃないから。

死体が多くて火葬できんから、運動場のすみに穴を掘って埋めました。車力にいっぱい死体を積んで、運んでザッと穴に移して、ガソリンをかけて焼きました。暑いときじゃから、臭いがものすごくて、その光景はよう忘れんですよ。ひどいもんじゃったです。骨を拾う人ものうてね。

一〇日ほどおって、いったん帰宅しましたが、また、命令が出て、もう一度行きました。今度は段原小学校で、本川るときよりは被害は軽かったですけど、それでも死んでいかれる人も多かったですよ。

救護に行った人で、死んだ人はなかったですけど、髪が抜けて丸坊主のようになった人はおりました。私は皮膚がただれて、長い間治らんかったですよ。原爆の一種でしょう。下痢も五〇日は止まらんかった。血便が出てね。シラミもいっぱい、もううて帰りました。

被爆後の救援は辛かったけど、それは期間が短いでしょう。そりゃあ勤労働員が一番きつかった。

呉の空襲がひどかったんですよ。毎晩の空襲で「もう逃げるのがしんどい」言うくらいねえ。工場は危ないから、隧道を掘って、穴の中に旋盤や機械を運んで作業をしました。空気が悪うてねえ。

六月の中旬に大空襲がありました。何べんも「もう解除になるじゃろう」言うても解除にならんのです。土地の人が山の中へ防空壕を掘って下さったけど、それが狭い防空壕でねえ、大勢で入るから、空気が薄うなあってしだい息が苦しくなつて窒息しそうになりました。「ああ、これでもう死ね」思いました。

そうしたら、よその学校の先生が「出んどだめじゃこのままじゃあ全

滅する」言われて外に出ました。そしたら、空に星がピカピカまたたい

て、「ああ、これが本当の地球の姿じゃねえ」と思いました。そのとき

の空気が、まあおいしかったこと。あんなに空気がおいしい思うたこと

はなかったですよ。

よう、生きとったことと思います。体のすぐそばに焼夷弾が落ちた

り。爆風にさらされてねえ。

いつしか六〇年余の歳月が流れました。戦争に勝つためと思って一

生懸命に働き、学校は工場化され、陸軍の被服廠の仕事、そして広の海

軍工廠への動員、着る物食べる物のない時代、衣料切符で買ってもらっ

たメリヤスのシャツ・木綿の靴下を着用し勇んで寒さの中、何の疑いも

なく動員先に向かいました。

その後何度かの敵機の空襲に遭い。幾度か死線をさ迷いました。防空

壕での長時間の苦しみ、空気は薄れていつの間にか外へ押し出され、夜

空の満天の星、特に空気の味の素晴らしさ、自然の恵みの尊さ、感謝の

溢れる思い出でいっぱいです。そして数多くの犠牲の上に今日の平和や

発展があるのだと思います。



戦時中の衣料配給切符